

(金のエンジェル賞 中学生の部)

## オオカミ男になりそうだ

中二・富樫 輝紀

「肉・肉・肉！」

最近、僕の体は肉を欲しがっている。今まではどちらかというところ、魚の方が好きで、お寿司は僕の大好物だった。ところがこの頃、肉食動物の気持ちがわかってしまうくらい、肉が食べなくなるのだ。肉だけではない。ご飯だって、何杯食べてもすぐにお腹がすくので、いつも食パンを一斤持ち歩いている。自分でも怖いくらいの食欲で、止めることができない。自分の中に、何か別の生き物がいるような気さえする。

学校で友達に話すと、反応はいろいろで、「僕はずっと少食だから、そんなに食べられないよ」とか「わかるよ。俺なんて、牛一頭食べられるよ」というやつまでいた。すると、クラスで1番の秀才でクールな勇樹が、人間の食の欲求について話し始めた。だが、そんな真面目な話は全く頭に入ってこなかった。ところが最後に「この前テレビで見たけど、オオカミ男がオオカミになる前は、すごい食欲がでて、肉が食べたくなくなって、スーパーに並んでいる肉を、全部買い占めるらしいぞ。それに、遠吠えしやすくなるように、喉の構造が変わるから、喉の調子も悪くなるらしい。お前もオオカミ男になるんじゃないの？」この言葉にドキッとした。スーパーの肉、今なら全部食べられるし、最近喉の調子も悪いのだ。僕をからかっているのか、勇樹は

---

「明日は満月だからな。オオカミ男出没なんていうニュースを見たら、通報するぞ」

そう言うと、いたずらっ子のように笑った。どうしよう。オオカミ男になるのだろうか？ 小心者の僕はとても不安になった。

勇樹の言葉が気になり、まっすぐ家に戻る気になれなかったのも、以前よく遊んでいた、公園に寄った。中学に入ってから、忙しくてなかなか来られなかったが、以前はこのブランコが大好きで、この公園に来るだけで、テンションがすごく上がっていた。

僕はブランコに座り、ゆっくりとこぎ始めた。いくらこいでも、空高くどこまでこいでも。僕のテンションは一向に上がらなかった。なぜだろう？ あんなに好きだったブランコなのに、あの時のようにテンションが上がらない。心までオオカミになりかけているのだろうか？ 僕は更に不安になってきた。

ところが、こんな不安な気持ちとは裏腹に、もうお腹がすいていた。さっき昼ご飯のお弁当を食べて、その後に、食パンを1斤食べたばかりだ。あれからまだ2時間もたっていないのに、もうお腹がすいているのだ。仕方なく僕は、家に帰ることにした。

玄関を開け「お腹すいた！」と母さんに聞こえるように大きな声で叫んだ。

「ただいま。が先でしょう。お昼のお弁当食べたばかりなのに、もうお腹がすいたの？」と母さんは笑いながら言った。僕は

「もう何か食べないと動けないよ。今日の夕飯は何？」と聞くと、冷蔵庫を開けながら母さんは

「今日はね、お料理教室で教えてもらった、フランス料理を作ろうと思っっているのよ。とつても美味しいんだから。びっくりするわよ」と言っって材料を取り出した。

---

---

「それって肉料理？」

「肉よ、フオアグラ。高いけど美味しいのよ」

「その美味しいフオアグラは、一人何グラム食べられるの？」

「グラムなんてわからないけど、このくらい」そう言うと、母さんは両手の人差し指と親指で輪を作った。

「ご飯はどれくらいあるの？」

「ご飯はないでしょう。だって、フランス料理よ。フランス料理はパンなのよ。大丈夫よ。あなたのためにパンも多めに買ってきたから」

ダメだ。足りない。そんな少量の肉では僕の体を動かすことができないのだ。

「高級じゃなくていい。安くていい。僕はお腹いっぱい肉を食べたいんだ」

僕が叫ぶと母さんは

「分かっているわよ。それと、いつものおまけのご飯3合と焼肉1キロも、ちゃんと用意してあるわよ。心配しなくていいから。安心しなさいよ」

呆れたようにそう言うと、夕飯の準備を始めた。だめだ。頭の中が肉でいっぱいになっている。他のことが何も考えられない。それに母さんはおまけと言っているが、フランス料理のおまけが、ご飯3合と焼肉1キロなんて、どう考えてもおかしいだろう。おまけだけで、1人前以上あるじゃないか。どうなっているんだ僕の体は。

その日も、おまけのご飯までしっかり食べきると、僕のお腹はやっと落ち着いた。ベッドに横になると、オオカミ男のことが頭に浮かんだ。やっぱりおかしい。あんなにたくさん食べないと、お腹が落ち着かないし、食べてもすぐにお腹がすく。喉の調子もいつもよ

---

り悪い。朝からずっとガラガラしているし、痛みもある。ここ数日、骨の中心がムズムズとしていたのだが、今夜はムズムズどころか、かゆくてしかたない。体の中心から、爆発しそうなほどのエネルギーまで感じる。それに、こんなに食べているのに太らない。太るどころか、この前の健康診断では、「少しやせているので、3食きちんと食べてね」と言われた。3食どころじゃない。5食も食べている。おやつは食パン1斤だ。これはどう考えてもおかしい。窓の外を見上げると、大きくて綺麗な満月が見えた。どうしよう。本当にオオカミ男になりそうな気がしてきた。今、遠吠えをしたらうまくできそうな気がする。怖くなり、僕は布団を頭からかぶって、人間でいられるように願いながら寝た。

翌朝、目が覚めると、いつもより体がすっきりと、軽くなっているような気がした。僕はまだ、ぼつちりと開かない目をこすりながら、ベッドから起き上がった。立ち上がろうとして、ふと枕の方を目を向けると、なんと、そこには僕の抜け殻が、そのままの形で寝ているではないか。

「うわぁ！ 何だこれ？」

僕は驚きのあまりベッドから転げ落ちた。まるでセミの抜け殻のように、まん中にまっすぐ切れ目が入っていて、僕はそこから起き上がったようだ。あれ？ ということは、僕は今、一体どんな顔をしているのだろうか？ 思わずパジャマをめくり、腕を確認した。

「よしっ」

毛は生えていない。いつものツルツルの肌だ。足も確認。足も特に変化なし。僕は顔を恐る恐る手で触ってみた。すると、これまた、変化はなさそうだった。まあ、これでオオカミになっていることはなさそうだ。人間ならば、少しくらい変な顔になっても、まあ

いいだろうと思った。早速、机の引き出しから鏡を探すと、ゆつくりと自分の顔を覗き込んだ。できれば、真っ黒に日焼けした、カッコいい、スポーツ男子に変身していることを望んでいたが、スポーツもしていない色白の僕が、真っ黒に日焼けしているわけもなく、そこに映っていたのは、以前にも増して、色白の肌に、真っ赤な唇の、白雪姫のような僕だった。

「えっ！ 変わらないじゃん。というか、前より色白になっているし、どうなっているんだよ」

すると母さんが、僕を起こしに2階に上がってきた。僕は慌てて抜け殻に布団を被せて、ベッドの横に座った。

「まあ、めずらしい。今日は自分で起きたの。いつもは起こしても起きないのに。なんだか今日は顔色がいいわね」

そう言うと母さんは降りて行った。別に悪い事をしているわけではないが、なぜか隠してしまった。こんなのを見たら、母さんは大騒ぎしてしまうかもしれない。いや、救急車を呼ぶなんて言われたら、カッコ悪いし。とりあえず、この抜け殻はどうしたらいいのだろうか？ 僕はしばらく考えたが、思いつかなかったので、父さんに相談してみることにした。父さんなら、母さんほど驚かないだろうと思っただからだ。

その日の夜、僕は父さんに抜け殻を見せた。それを見た父さんは、驚きもせず

「懐かしいなあ。お前もそんな年になったのか」と言った。

「父さん、抜け殻のこと知っているの？」と聞くと

「これはセミの抜け殻と一緒に、子供から大人へと脱皮したんだよ。珍しくもなんともないよ。みんな脱皮して大人になるのさ。これをとっておけば、大人になった時に、この抜け殻を着ると、1日だけ

---

子供に戻ることができるとだ。父さんは同窓会の時に、友達とこの抜け殻を着て、子供に戻って、1日中駆けずり回ったよ。あの時は久しぶりに楽しかったなあ」

父さんは、当時を懐かしむように、目を細めて話してくれた。

そうだったのか。オオカミ男に変身しそうになっただけではなかったのか。僕の体がムズムズしていたのも、あんなにご飯を食べなくても太らなかつたのも、喉の調子が悪く、声のトーンが低くなり、みんなに風邪気味なの？ って心配されていたのも、ブランコに乗ってテンションが上がらなくなつたのも、すべては、大人になつたからだったのか。

ホッとした僕は、全身が映る大きな鏡で、新しくなつた僕の体を映してみた。脱皮したてのせいかな、色白が増しているような気もするが、体格が大人になつたような気もする。これは、今日1日で変わったわけではないと思うが、自分の全身を鏡に映すことなんてめつたにない僕は、急にがっかりとしたように感じた。背はまだ低いので、大人に間違えられるようなことはないと思うが、間違つても、レストランでお子様メニューを渡されたり、僕ちゃんいくつ？ なんて聞かれることはないだろう。

それから、僕の食欲は相変わらずだが、抜け殻はいつか、子供に戻りたくなつた時まで、大事にしまつておくことにした。

小学生の男子の皆さん。もうじき皆さんにも、こんな日が必ず来ますよ。大丈夫。どんなにたくさん食べても、オオカミ男にはなりませんから。脱皮したら、抜け殻は湿気に弱いので、乾燥した場所で大切に保管してください。そして、大人になつて疲れた時に、それを着て、僕と一緒に思いっきり遊びましょう。

---



画：長田結花